私の文房四宝

◇ 第八回 宮澤鵞州 先生

月刊「書写書道」課題揮毫者が愛用する「筆・墨・硯・紙」について、いつから使用している用具なのか、どのように手に入れたのか、使い心地など、各先生の用具への思い入れを題材に連載しています。今回は、長年課題を揮毫されている宮澤鵞州先生に、書写教育と文房四宝の関係などについてお話しいただきます。

文房四宝に支えられて（二）

大学教員となった私は、小、中学校教員養成の書写を担当し、書写の学習要素の分析や教材の研究・開発・作成などを手掛けるようになりました（**写真1**）。書写の学習要素の一つに「用具・用材」があり、毛筆書写学習に関わる用具・用材の一部を「文房四宝」として捉えられることから、今回は書写教育と文房四宝の関係を記します。

書写教育と毛筆

書写の教材を作成するうえで重要なのは「毛筆」です。書写教育でなぜ「毛筆」なのか。その意義は、文字を書く基礎・基本を習得するために、古来、使われてきた毛筆によって点画の書き方や字形の整え方を追体験し、「他の筆記具に転移・応用できるようにする」ことです。しかし、この観点でいえば難しい用筆や高度な字形の理論を習得させるものではないので、初心者には腰が安定して、穂先がまとまりやすい性質の筆をおすすめします。このような条件のもと、私が教材を作成する際には次の①～④の筆（**写真2**）を用いています。

①学生ときぞう（文明堂）

筆名通り書写の学習者向けの筆です。羊毛と白天尾（白馬の尻尾の毛）によって筆先のまとまりがよいので、初心者でも書きやすい筆です。

②王羲之蘭亭（一徹堂）

鼬の毛で、軟らかさの中に弾力が期待できる筆です。拙著『常用漢字書きかた字典』（二玄社）で示した毛筆文字は、この筆で揮毫しました（**写真3**）。半紙一字書きで、常用漢字をすべて書き終えるまでに相当の量を書くことが予想されたため、初めにこの筆を十本手元に用意しました。実際には五本を交互に使って書きました。

比較的、硬い毛質の筆でありながら柔軟性も持ち合わせているため、楷書の直線的な点画も硬くなりすぎず、軟らかさも含めて書ける印象を持っています。

③春日局（文明堂）

鼬と馬毛で腰がしっかりしており、穂先の弾力が利く筆です。また、行書の教材「紅葉」はこの筆で書きました（**十頁写真4**）。この筆は穂先の弾力が強いので、行書の折れや点画の太細の変化などを自在に出せます。

また、学年と氏名は**④唐筆「双料写巻」**で書きました。穂先がまとまりやすく、とても書きやすい小筆です。書いた後は、濡れた紙などで墨のついた部分をふきとっておくと、次回使う時に書きやすく、長持ちします。

液体墨の普及と固形墨の誤解

写真4の「紅葉」は液体墨「玄徳（呉竹）」を

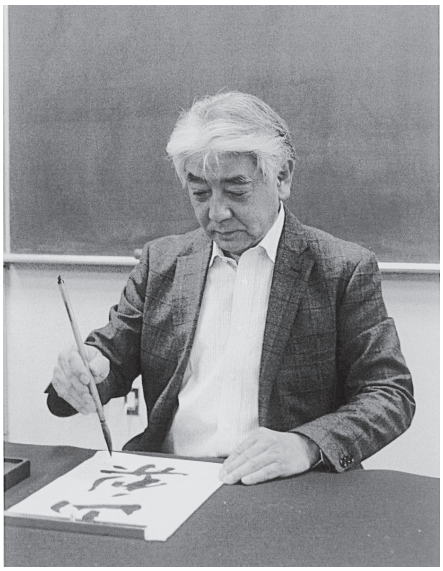


写真１　書写学習の充実のため力を尽くした

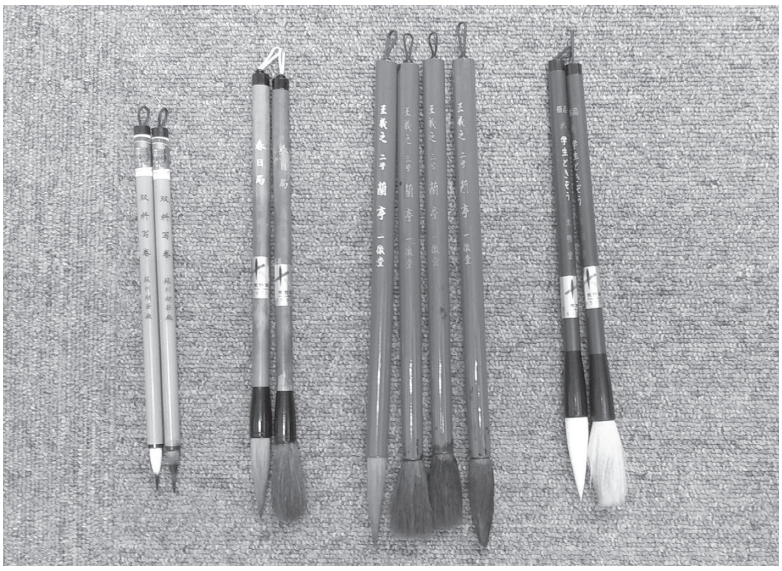


写真２　（右から）①学生ときぞう、②王羲之蘭亭、③春日局、④双料写巻



写真３　王羲之蘭亭ですべての文字を揮毫した拙著

使用しました。墨の一定の濃さを保って書きたい場合は、液体墨がおすすめです。また、墨池はプラスチック製でもよいのですが、私は硯を二面用意し、一方には液体墨を、もう一方には水を用意して濃さを調整しながら書きます。

昨今、液体墨の品質は向上しており、多様な表現ができるものも多数開発されている（液体墨については令和七年五月号も参照）一方で、学校の書写の授業で固形墨を磨る機会は、ほとんどないといわれています。

その理由として、書写セットのかばんの中には硯（主にプラスチックやセラミック製）と小さな固形墨が入ってはいるものの、すぐ書ける液体墨の存在があること、さらに、授業時間が短く墨を磨っている余裕がないことなどが挙げられます。聞くところ、児童に固形墨のことをたずねると、「文鎮の補助用具ではないか、良い匂いがするので防臭剤・芳香剤ではないか」などの答えが返ってくることもあるそうです。

また、墨は衣服などに付くと洗っても落ちないことから「汚い」ものとして扱われることがありますが、これは大きな誤解です。

今から３０００年以上も前の殷の時代に墨で下書きされた文字が現在でも残っています。つまり、墨が長い年月を経ても変質しない、優れた性質を持っていることが証明されているわけ

です。これゆえに、墨が長期にわたって書写の用材として活用されてきたのです。汚い用材として扱うなど、とんでもないことなのです。文字文化の一つとして墨の高い特性を理解するために、墨を磨る機会を意図的、計画的に創出したいものです。

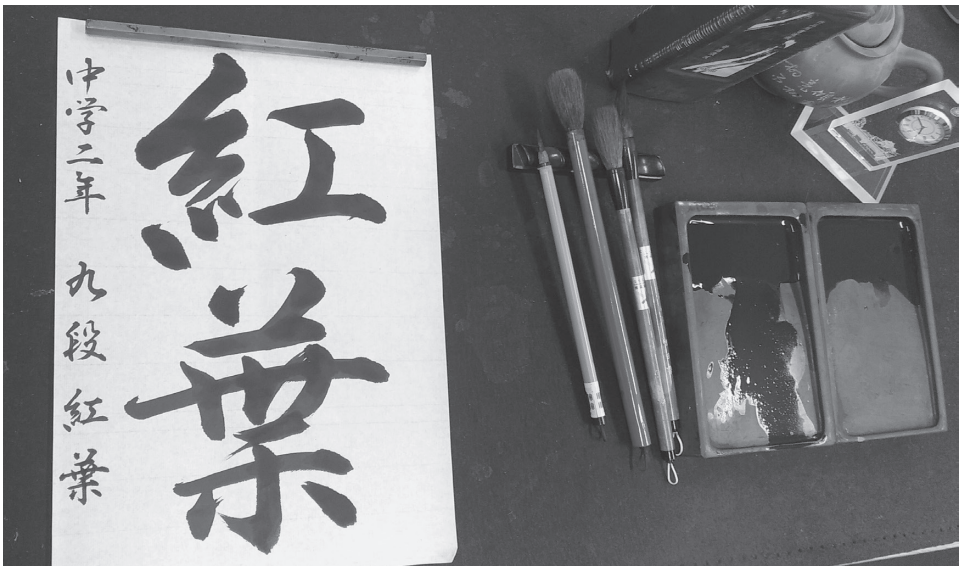


写真4　春日局で半紙「優美」に書いた教材



写真5　筆との相性もよく、「優美」とともに長年愛用している半紙「特級」

磨墨の機会を増やそう

ここで一つ提案です。ぜひ、学校や書塾で墨を磨る機会をつくってほしいと思います。磨墨による触感と墨の匂い、磨った液と毛筆、紙のすべてが一体となって絡み合う感触、そして半紙に現れる滲みやかすれなどを体感してほしいのです。

これらの五感を通じた磨墨の経験が、いずれ書き文字、書道文化を深く理解することにつながると私は信じています。その実現のためにも、小、中学校において、机に毛氈が敷かれて硯が用意されている、「書写室」の設置を希望します。同様に書塾においても、学習者が「いつでも文房四宝を手に取ることができる」環境を整えてほしいと願っています。

手放せない「優美」と「特級」

写真4の「紅葉」は、「優美」という半紙に書かれています。書写教育に携わるようになって以来、教材作成は長年この「優美」にお世話になっています。機械漉きの紙ながら、手漉き風の味わいを感じることができます。滲みが少なく筆の軌跡が明瞭で、線の交わりや接し方もはっきり出るため、書写の教材向きといえます。

一方、日頃臨書をしたり作品の草稿を練ったりする際は、手漉きの「特級」という半紙を専ら使っています。筆との摩擦が心地よく、滲みやかすれなどが期待通りに表現でき、他の半紙に換えることができなくなりました（**写真5**）。

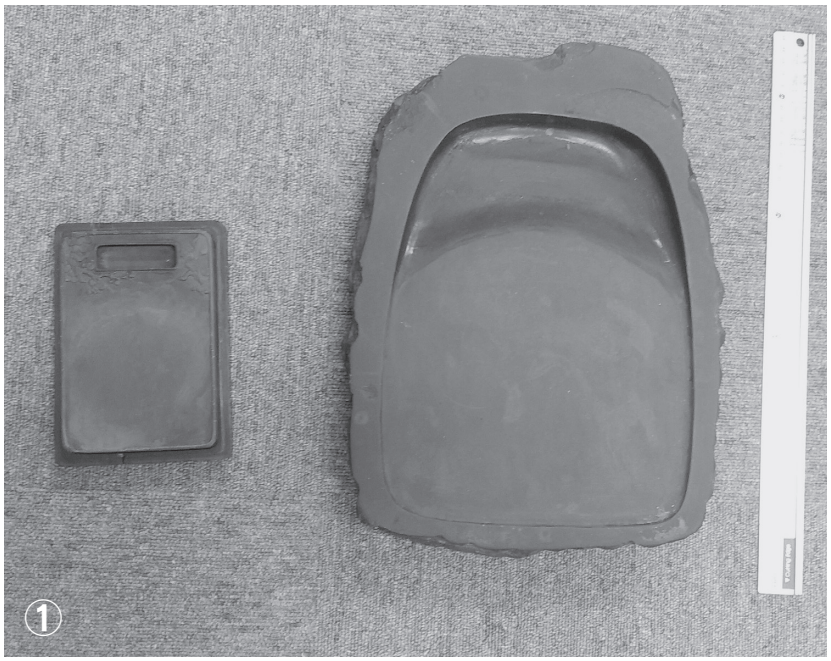




写真6　（①）父から受け継いだ雨畑硯（右）と端渓硯（左）をはじめ、集めた「文房四宝」（②③）はすべて大切な宝物である

父の形見の硯

硯について、私は父の形見として雨畑硯と端渓硯の二面を受け継ぎました（**写真6①**）。雨畑硯は長さが50㎝ほどあり、大変大きく、存在感のある硯です。私が物心ついた頃には既に父の仕事場の後方に鎮座していて、周囲の空間を支配する、まさに「重し」の役割を担っていました。

端渓硯の存在を知ったのは私が就職をしたころでした。石面に水を付けると深い紫色（馬肝色）が浮かびあがり、不思議な構造をした古硯です。海の部分が池のように独立しており、ここに水を入れ、墨を磨る時にスプーンで陸（墨を磨る部分）にすくいあげる方式の硯のようです。今となっては、父から硯を入手したきっかけなどを聞くことができなくなってしまったのが悔やまれます。

今回の連載を機に、散在していた筆・墨・硯などを整理して並べてみました（**写真6②③**）が、短くなった墨、洗い残しのある硯、軸が割れてきた筆などから思い出が蘇りました。決して高級品ではありませんが、これらの一つ一つは私にとって大切な「宝物」であることを再確認する、よい機会になりました。